HCAP 東京カンファレンス 2017 報告書

HCAP Tokyo Conference 2017 Final Report

2017年 4月 16日

HCAP 東京大学運営委員会 11期

HCAP TOKYO

本報告書について

本報告書は HCAP（Harvard College in Asia Program）東京大学運営委員会 11 期が企画・運営した、「HCAP 東京カンファレンス 2017」について報告することを目的としたものである。

目次

01　本報告書について
01　目次
02　代表挨拶
03　HCAP とは
03　HCAP 東京カンファレンス 2017 概要
04　HCAP 東京カンファレンス 2017 協賛・協力
05　プログラム詳細報告
　　演劇ワークショップ　【2 日目（3 月 12 日）】
　　東京観光―東京の街を歩く―　【3 日目（3 月 13 日）- 6 日目（3 月 16 日）】
　　HCAP Summit 2017―これからの学生生活を考え直す―　【3 日目（3 月 13 日）】
　　カレー作り―同じ釜の飯を食う―　【4 日目（3 月 14 日）】
　　『千と千尋の神隠し』に見る日本の精神文化　【5 日目（3 月 15 日）】
　　ロボットの発展―人間とは何か？―　【6 日目（3 月 16 日）・7 日目（3 月 17 日）】
　　高校生交流企画　【6 日目（3 月 16 日）】
　　京都観光―京都の歴史を紐解く―　【7 日目（3 月 17 日）・8 日目（3 月 18 日）】
13　HCAP 東京カンファレンス 2017 総括
14　HCAP 東京カンファレンス 2017 会計報告

HCAP TOKYO

代表挨拶

2016 年春に結成された HCAP 東京大学運営委員会 11 期は、2017 年 3 月 11 日から 3 月 19 日にかけて、一年間の集大成である HCAP 東京カンファレンス 2017 を無事終えることができました。ここになんとか至ることができたのは、様々な形でご支援・ご協力してくださった皆様がいたおかげだと強く感じております。本当にありがとうございました。深く御礼申し上げますとともに、本報告書にてカンファレンスの様子を報告致します。

カンファレンス終了に漕ぎ着くまでの道のりは、多くの苦悩やつまずきがあるとともに、濃厚で学びが多いものでした。

テーマ、場所、その他の内容が何も決まっていない、「ゼロから作る」カンファレンスの企画会議では、価値観の違いを擦り合わせることの難しさ、何かの面白さや楽しさをうまく言語化できない苦しみなどを日々感じながら、メンバー相互の理解を目指しました。8 月にハーバードにカンファレンスの企画書を提出し、9 月に受理されたとのメールが届いてからも、大学に入って初めて行なう渉外活動で、高校生の時とは少し違う社会人の方々との向き合い方、例年より少ないメンバーでの仕事分担などに日々頭を抱え、カンファレンスが開催できるための必要材料を集めるのに走り回りました。カンファレンス当日も、日本で「常識」とされるものをハーバード生にどう伝えるかで苦戦し、内容盛り沢山な行程を無事運営すべく体力と戦いながら、日本の魅力を最大限に伝え、驚きが絶えない 8 日間にできるよう全力を尽くしました。

HCAP での一年間を最大限いかすことができるか。それは去年の春に 11 期として採用された私たちに問われていたものであり、今ならもちろんと答えることができます。 しかし、私たちが本当に試されているのはこれからです。一年間重ねてきた議論の中で見えて来た自分の価値観や強み、弱みを知った上で、これから何をして行くか。カンファレンス開催に向けての企画・準備を通して得たスキルを、これからどのようにして生かすのか。8 日間で構築したハーバード生との関係がどこまで続くか。彼らとお互いの人生に影響を及ぼし続けられるか。8 日間の経験と、それまでに HCAP にかけた時間を糧に、ここで得たものを社会に還元できるよう、尽力してまいります。 繰り返しとなりますが、ここまで私たちがたどり着くまでにご支援・ご協力して下さった皆様、心より感謝の意を申し上げます。本当にありがとうございました。

HCAP 東京大学運営委員会 11 期 代表
髙佐綾菜

HCAP とは

HCAP（Harvard College in Asia Program）とは，ハーバード大学に本部を，アジアの 9 つの国と地域のトップレベル大学に支部を置く，学生主体の団体です。学生間でアメリカとアジア各国の架け橋となるような関係を構築するため，学術・文化・交流を軸に学生会議や交流活動を行う「カンファレンス」を開催しております。

その日本支部である HCAP 東京大学運営委員会は，東京大学公認の学生団体です。「ハーバードカンファレンス」（毎年 1 月にハーバード大学にて行われるカンファレンス）への参加と「HCAP 東京カンファレンス」（毎年 3 月に日本にて行われるカンファレンス）の主催を二本柱として活動しております。

HCAP 東京カンファレンス 2017 概要

主催	HCAP 東京大学運営委員会 11 期
日程	3 月 11 日（土）～3 月 19 日（日）
参加者	東京大学学生 7 名 早稲田大学学生 1 名 ハーバード大学学生 11 名

HCAP 東京カンファレンス 2017 協賛・協力（敬称略）

協賛　株式会社ベネッセコーポレーション Route H
東大駒場友の会
アメリカ大使館
株式会社プレジデント社

後援　アメリカ大使館
外務省

顧問　東京大学大学院総合文化研究科・教養学部　准教授　松田恭幸

企画協力

「演劇ワークショップ」企画
劇団「青年団」
平田オリザ
工藤千夏

「『千と千尋の神隠し』に見る日本の精神文化」企画
慶應義塾大学文学部　非常勤講師　正木晃
神社本庁教化広報センター　教化広報部広報国際課　課長　岩橋克二
神社本庁教化広報センター　教化広報部広報国際課　録事　砥山洸一
東京大学大学院人文社会系研究科・文学部　教授　藤原聖子

「ロボットの発展―人間とは何か？―」企画
東京大学流体工学研究室　光石・杉田研究室　医用精密工学研究室
東京大学精密工学科　准教授　小林英津子
大阪大学次世代内視鏡治療学共同研究部門　特任教授　中島清一

「高校生交流」企画
株式会社ベネッセコーポレーション
英語・グローバル事業開発部　グローバルラーニング課
Route H　責任者　尾澤章浩

その他ご協力
国立オリンピック記念青少年総合センター
東京大学渉外本部シニア・ディレクター　佐藤淳
東京大学渉外本部シニア・ディレクター　柴田敏之
東京大学渉外本部シニア・ディレクター　関太平
東京大学渉外本部マネージャー　石岡吉泰
東京大学社会連携部　渉外・基金課　三留智人

プログラム詳細報告

以下プログラムの詳細を紹介します。

演劇ワークショップ

【日時】 3 月 12 日（日）13:30-16:00（2 日目）

【場所】 目黒区駒場住区センター

【企画目的】

- 1 月に開催されたハーバードカンファレンスから 2 か月たった時点で、改めて親睦を深める。
- 国際交流の中で最も重要な点である文化や言語の差異によるディスコミュニケーションを明示的に意識する。
- 日本の社会問題について，可能な限りその空気感も合わせて「リアル」な現状を伝える。

【企画内容】

劇団「青年団」を主宰する劇作家平田オリザ様オリジナルの、数を書いたカードを用いたアイスブレイクを行い、同じ形容詞でも人によって程度の感じ方が違うことを実感した。その後、工藤千夏様の主導のもとノンバーバルなアイスブレイクを行い、大いに盛り上がった。

その後、待機児童の問題について、社会全体を視野に入れた概説を簡単にプレゼンテーションした。どうしてこうやって解決しないのか、という観点の質問が多く、その後、実際に生活の一場面として待機児童の問題が対立を生む場面を日英同時通訳の寸劇として演じた。保守的なジェンダー観に基づく台詞のタイミングでブーイングが出るなど、ハーバード生らはしっかり聞き入ってくれたようであった。

最後に、東大生とハーバード生の混合チーム 4 チームに分かれて寸劇を作成した。バス停におけるスキット、国際結婚の友達のところに訪れるスキットを準備して臨んだところ、案の定、いかに挨拶をするか、家でどう振る舞うかというところに文化の違いが顕著に現れた。また、各チームの寸劇について、専門家の工藤千夏様よりコメントを頂いた。

【総括】

もともとはメンバーの一人が高校時代に受けた演劇ワークショップに発想を得て作った企画であった。そこでは、文字の情報だけからいかにイメージをすり合わせるかというところに主眼があったが、今回は異文化であることを明示的に意識することにある程度成功したように思う。また、待機児童の問題をプレゼンと普段の生活の一場面を切り出した寸劇のセットで提示する手法には可能性を感じた。今回のハーバード側の学生は女性が多いこともあり、「男性が働き女性が家事・育児をする」という保守的な家族観にはかなり抵抗感があった。しかし、現実に保育園に入れないという社会問題は家族観とは切っても切り離せないものであり、それを表現できたのは成果であった。

東京観光　―東京の街を歩く―

【日時】 3 月 13 日（月）9:00-15:00（3 日目）
3 月 14 日（火）9:00-16:00（4 日目）
3 月 15 日（水）20:00-21:00（5 日目）
3 月 16 日（木）9:30-10:30（6 日目）

【場所】 秋葉原・お台場・浅草・上野・原宿・赤羽橋・代々木

【企画目的】
- ハーバード生に楽しい時間を過ごしてもらう。
- 共に時間を過ごすことで親睦を深める。
- ハーバード生に東京の多面性を伝える。

【企画内容】
3-6 日目に、秋葉原・お台場・浅草・上野・原宿・赤羽橋・代々木をグループに分かれて観光した。グループについては、初日に行き先の紹介を付したアンケートに答えてもらった上で編成した。お台場では、日本科学未来館で日本が世界に誇るアンドロイド(人間の姿や性質を模したロボット)と話す体験をしたり、台場一丁目商店街で昭和の雰囲気を味わいながらお土産探しをしたりした。浅草周辺を散策したグループは、浅草寺や合羽橋商店街など有名どころを周りつつ、おでんやあんみつ等の日本の味を楽しんだ。純粋に観光名所とグルメを堪能するのみに留まらず、秋葉原のメイドカフェや街中の広告を見たところから発展してジェンダー観について話をしたり、上野のアメヤ横丁で戦後の話をしたりと、観光を通して社会に対する互いの視座を共有することができた。

【総括】
初日のアンケート回答時、持参した観光ガイドブックを広げたり私たちに質問をしたりと、ハーバード生は各行先を入念に比較しては悩むに悩んでいた。「この 1 週間は私たちにとって本当に特別な非日常だから，出来る限り色々なものを見て経験をしたいと思っている」という一人のハーバード生の言葉の通り、各行先の歴史的・文化的背景について東京メンバーと盛んに話したり、それぞれの瞬間を後で思い出せるようにと沢山の写真を撮ったりしているメンバーが多くいた。東京の中にある現代文化と歴史の名残双方を堪能することができ、私たちもハーバード生も大いに楽しむことのできる観光の時間であった。

HCAP Summit 2017　―これからの学生生活を考え直す―

【日時】　3 月 13 日（月）15:30-18:00（3 日目）

【場所】　東京大学駒場キャンパス和館

【企画目的】

- 大学生活や将来の目標について腹を割って語り合える個人間の繋がりを、大学間の壁を超えて築き上げる。
- そのようなコミュニティの重要性を参加者に感じてもらう。

【企画内容】

企画は三部構成となっており、第一部ではアイスブレイクを、第二部・第三部では,「なぜいまの大学あるいは学部を選んだのか」そして「大学生活のうちに実現したいこと」といった、普段はなかなか話せない自分の考えについて自由に語り合うグループセッションを行った。参加者はハーバード生を含めた大学生 50 名であり、東京大学以外の学生も数多く参加した。

第一部のアイスブレイク企画では、People Scavenger Hunting という企画を行った。この企画は、5 マス×5 マスのカードに書かれた、人の特徴や考えについての文章、例えば Speak 3 or more languages や Think him/herself as smart/genius といった文章について、その特徴や考えを持った人を探しながらビンゴ達成を目指すというゲームである。

第二部・第三部では、6、7 人のグループに分かれ、各参加者が思い思いの話をしていた。自分の興味分野から男女共同参画や介護・福祉についての話を深めている班もあれば、大学生にできる課外活動の意義について話している班もあり、参加者は有意義な時間を過ごしていたようであった。

【総括】

近年、日本の大学の学生の質が下がってきていることが広く報じられている。その原因を挙げれば切りが無いが、塾業界の発展によって「名門大学に合格すること」自体が成功のロールモデルとして示され、何のために大学に行くのか、大学へ通って何をしたいのかを考えることなく大学へ進学する学生が増えたこと、そしてそのような学生が表に出てくることによって、確固たる目的意識を持った学生が、互いの考えをぶつけ合うことが困難になってきたことが大きな原因として挙げられるように思う。HCAP メンバーも当初から大学生活への目的意識を掲げることはできていなかったが、1 年間の議論を通して、互いの考えをぶつけ合うことの重要性を学んできた。本企画では、その重要性をより多くの学生に理解してもらい、また各人の将来の展望についての話を語り合える仲間を作ることを目的として掲げており、各テーブルで真剣な話し合いが行われていたことから、その目的は十分に達成されたように感じた。また、一般参加学生の約半分が東大以外の学生によって構成され、HCAP メンバーと直接関わりを持たない学生の参加も一定数見られたため、多様な考え方を持った学生が集まったことに非常に意義があったように感じる。

カレー作り　―同じ釜の飯を食う―

【日時】　3 月 14 日（火）17:00-20:00（4 日目）

【場所】　目黒区民センター社会教育館調理室

【企画目的】

・ 共同での調理・食事を通してハーバード生との心的距離を縮める。

【企画内容】

自分たちで食材の買い出しを行った後、4 グループに分かれて調理をした。1 班は一般的なカレールウを用いたカレーを作ったが、残りの 3 班はハヤシライス、ドライカレー、ハラール対応のカレーと、各班違うカレーを作った。

各班、調理に慣れている者と慣れていない者がおり、互いに指示を出し合いながらの調理は非常にインタラクティブな時間であった。自分たちで調理をしたからこその美味しさもあり、「日本食」を一緒に食べる夕食とは違った良さがあった。

【総括】

「この料理は彼が・彼女が作ってくれたのだ」と考えながらカレーを食べることによって、ディスカッションや日常会話とは異なる心的距離の近さを感じることができた。やはり「君が作ったカレー，美味しいね」と言われるのは純粋に嬉しいものである。「同じ釜の飯を食う」という言葉の本質はここにあったのではないかと思う。

ハーバード生からは全体的に調理を普段あまりしない印象を受けた。彼らはほとんどが寮生活であり、学食や外食での食事が多いからである。この点からも、彼らとの生活感の違いが感じられた。

最後に、食材の買い出しをしている際に 1 つ気付きがあった。スーパーマーケットを数件回ったが、市販のカレールーはいずれにも豚肉由来の食品が用いられていたのである。そのためカレー粉を用いての調理を強いられたが、カレー粉に混ぜるべきスープの素にも大抵は豚肉由来の食品が用いられており、日本の食品のハラールへの対応が不十分であることを痛感させられた。

『千と千尋の神隠し』に見る日本の精神文化

【日時】 3 月 15 日（水）11:00-17:30（5 日目）

【場所】 アメリカンセンターJAPAN
東京大神宮（境内、マツヤサロン）

【企画目的】

- 日本アニメの代表作の 1 つである『千と千尋の神隠し』の面白さ・奥深さを共有する。
- 日本独自の宗教観や精神文化、寺社文化について、ハーバード生に理解を深めてもらう。
- 参加者一人ひとりが自身の精神文化を見つめ直し共有する機会を設けることで、参加者間の内面の相互理解を深める。

【企画内容】

まず、アメリカンセンターJAPAN にて、当団体メンバーが「『千と千尋の神隠し』に見る日本の宗教と伝統」と題して、本映画で垣間見える、日本人特有の思想・伝統・宗教について 45 分程度の講義を行った。日本特有の伝統思想に対する意見交換では、神や精霊に対するイメージが彼らと私たちで違うことが浮き彫りになったり、八百万の神とお天道様のような絶対的な神が共存する日本人の信仰について改めて考えさせられたりと、多くの気づきがあった。

午後は、神社本庁の岩橋様に、日本特有の宗教の一つである神道を中心とした、日本人の宗教観に関する講義をして頂いた後、日本人 2 人・ハーバード生 2~3 人の小グループに分かれて、当団体メンバーがそれぞれの精神文化についてハーバード生に話す、「HCAP Tokyo と日本の精神文化」と題したディスカッションを行った。

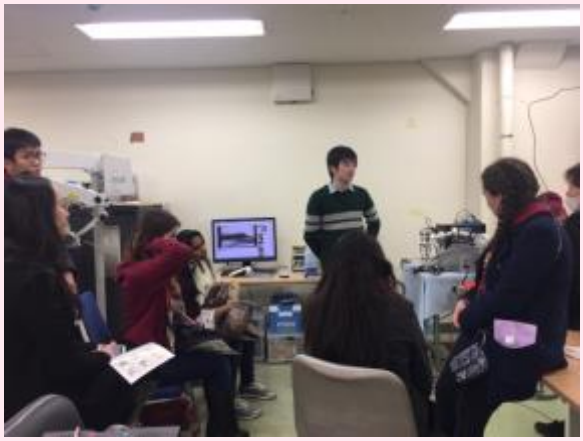
アメリカンセンターJAPAN を後にし、飯田橋にある東京大神宮に伺った。鳥居や絵馬、おみくじなど、神社特有のものを紹介しながら、お手水や参拝などの作法を解説した。その後、神主の方のご案内のもと、境内内の神前結婚式のための披露宴会場であるマツヤサロンを見学した。加賀の前田家の屋敷を移築・改装した趣のある建物を見せて頂いた。

【総括】

海外生活の折、日本の「無宗教」的価値観を理解されなかった経験を持つメンバーが、「ハーバード生と互いを理解し合い、良好な関係を築くために、日本独特の精神文化を伝えたい」と感じ、当企画の開催に至った。

しかし、「宗教」は重くデリケートなテーマである。そのため、学術的正当性に留意しながら、面白いと思える企画内容を考えるのは、容易ではなかった。故に、専門家のご意見を仰いだり、何度も寺社を見学したりした。具体的には、『「千と千尋」のスピリチュアルな世界』をはじめ、ジブリ映画に関する本を多く執筆していらっしゃる、宗教学者の正木晃先生に、「千と千尋の神隠し」について事前講義をして頂いた。また、宗教教育の専門家である、藤原聖子先生の研究室に伺い、本企画の内容についてご意見を頂戴した。寺社見学については、深川不動尊と東京大神宮に正木晃先生ご引率のもと伺った。これらの準備は、日本の精神文化について知識を得て思考を巡らすことができたという点で、日本人メンバーにとっても糧となる機会となった。

ロボットの発展　―人間とは何か？―



【日時】　3 月 16 日（木）12:30-14:30（6 日目）
3 月 17 日（金）16:00-17:30（7 日目）

【場所】　東京大学本郷キャンパス
流体工学研究室
光石・杉田研究室
医用精密工学研究室
京都 YWCA

【企画目的】

- 今年度の HCAP 全体を貫くテーマである"Global Health"に即し、日本の医療開発の現状について伝える。
- 医師という職業の観点から今後の世界における「イノベーション」を見つめ直す。

【企画内容】

・3 月 16 日（木）「医用工学に接する」

流体工学研究室では、東隆教授に新しい超音波診断技術をご紹介頂いた。リングで撮像対象を囲った上で輪切り状にスキャンすることで、従来のエコー診断以上に鮮明な 3D での診断画像が作成できるという画期的なお話に参加者一堂驚かされた。

続いて伺った光石・杉田研究室では、原田香奈子准教授をはじめとする研究室の方々から、開発中の手術用ロボットの説明をして頂いた。網膜下への薬の注入などに使用されるロボットについて、その精度の高さに、実用化はいつごろになるのかといった質問が出ていた。

最後の医用精密工学研究室では、心臓の不整脈のうち、心臓中の電気刺激が渦巻き状に発生する「スパイラル・リエントリー」の可視化についてお話を伺った。LED 光を用いた可視化の方法に関してはもちろん、「実験の際にウサギの心臓はどうやって生きた状態にしているのか」といった実験手法に関する質問もあり、興味を抱いている様子だった。

・3 月 17 日（金）「医療におけるイノベーション」

大阪大学の中島清一教授を招いて、”How Innovation works in the future?”をテーマに講演をして頂いた。

まずは、前日の医用工学研究室の内容も踏まえつつ、先生が開発に関わった内視鏡用器具などについて説明して頂いた。高度な技術の適用を前提として整備された手術室でなくても使えるような手術道具の開発を研究方針としていらっしゃることが印象的であった。その上で、途上国向けに開発されたこれらの機器が逆輸入されて先進国の緊急医療の現場で使用されているケースがあることをご紹介頂いた。

講演後には質疑応答の時間を長めにとり、講演内容に加えてより一般に医学に関連する内容についての質問にご回答頂いた。ハーバード生からは、「各々の機器が現段階でどの程度実際に使用されているか」、「連携先として何故アフリカなどではなくインドを選んだか」など、多くの質問が出た。

【総括】

前半の「医用工学に接する」は、実用段階に入る直前のためまだ身近に感じることが少ない医療工学研究の最先端のうち、日本が特に優れている分野を中心に、現実味を持って触れてもらうことを目的に企画した。実際に研究室を訪れてロボットの実物を見ることによって、ただ講義を聴く以上に参加者の興味をかき立てることに成功したと自信を持っている。

一方、後半の「医療におけるイノベーション」は、今後の医療の発展方針や、その発展に寄与するために人々が学ぶべきことにより注目した企画であった。前日の「医用工学に接する」で見た先進的なロボット医療の発展だけでなく、より現実的なニーズに合わせた機器の開発の重要性も再認識することができた。また、今回は途上国のニーズを適切に捉えるという視点を先生からご提示頂いたが、今後は自分で獲得できるように広範な物事を学んでいきたいという思いを強くした。本来のテーマは医療であったが、医学を志していない参加者にとっても意義ある企画となったであろう。

高校生交流企画

【日時】 3 月 16 日（木）15:30-19:30（6 日目）

【場所】 T's 渋谷フラッグカンファレンスセンター

【企画目的】

- 海外進学を志す高校生達にハーバード大学生との交流機会を提供し、日本では比較的得ることが困難な現地の情報を集める一助としてもらう。
- 大学生として、高校生に大学選択の志望動機とその後の変遷のロールモデルを与えることで、自己分析の尺度とモチベーション維持のための材料を提供する。

【企画内容】

まずは東京大学とハーバード大学の代表者 3 名ずつが、各々の大学の授業、施設、課外活動についてのプレゼンテーションを行った。高校生にどちらの発表が優れていたかジャッジしてもらうバトル形式をとり、ハーバード生にも事前準備にしっかりと時間を割いて臨んでもらった。

その後「大学生活の理想と現実」をテーマに、小グループに分かれてのディスカッションを行った。自身の大学選択時に何を考えていたか、実際に大学に入ってみて当初想定していた経験ができているか、について大学生側は主に述べた。その上で、各高校生の疑問や悩みに答える形式で大学生がアドバイスを行った。ディスカッションはメンバーをシャッフルして 2 度行い、その後の自由歓談も通して、各参加者にはできるだけ多くの人と話してもらった。

【総括】

高校生とハーバード生ともに驚くほど交流に積極的で、本企画は大いに盛り上がった。ハーバード生が自身のことについて熱く語り、呼応して高校生も自身について一生懸命伝えた上で、キャリア形成に関連した様々な質問をしていた。

集中的に勉強し様々な刺激を受ける環境として、ハーバード大学が非常に優れていることを再認識するとともに、初対面の高校生達をも上手に惹きつけていくハーバード生の人としての魅力に感銘を受けた。高校生達も本企画を通して、ハーバード大学を初めとする海外の大学に対して同様に憧れを抱き、メリット・デメリットを理解した上で将来積極的に出願してくれたら嬉しく思う。

また、自分の将来について真剣に考え、英語を用いて積極的にハーバード生に話しかけていく高校生達を見て、自身の過去を思い出すとともに大きなエネルギーをもらった。帰りのバスでハーバード生の 1 人も同じことを感じたと聞き，今回の企画が高校生のみならず大学生側にとっても意義あるものになったとの自信を深めた。

京都観光　―京都の歴史を紐解く―

【日時】　3 月 17 日（金）12:00-16:00（7 日目）
3 月 18 日（土）9:00-17:00（8 日目）

【場所】　東山、北山、伏見

【企画目的】

- ハーバード生に、東京とは異なる風土を持った京都の街を紹介する。
- 宗教企画で学んだことを基盤にして、ハーバード生に改めて寺や神社に触れてもらう。
- 歴史的背景を伝えることで、街の構造の面白さを理解してもらう。

【企画内容】

7 日目と 8 日目に京都を回った。7 日目は東寺を訪れ、ロボット企画をしたのちに四条の繁華街を歩き回った。8 日目は、金閣寺、竜安寺、伏見稲荷大社、八坂神社を訪れたあと再び四条でお土産を購入するなどした。世界遺産同士が歩いて 10 分ほどの距離に位置していることにとても驚いているハーバード生もおり、京都という街としての文化的な価値を感じてもらえたようだった。また、街の人に声をかけられる機会があったり、エスカレーターで立つ位置が違うことなど、東京との雰囲気の違いにも敏感に気づいてくれた。一方で、いわゆる観光名所で写真を撮るのを存分に楽しんだようであった。

【総括】

もともとはただの京都観光で終わらせてはならない、という強い思いがあり、京都の歴史的な背景をしっかり伝えた上でその痕跡が見られる場所を見て回るというフィールドワークのような形式を想定していた。しかし、ハーバード生は見た目の良い場所で良い写真を撮ることをとても楽しんでいることがそれまでの東京観光で強く感じられたのもあり，観光名所をできる限り効率良く回る方針に変更した。結果としてかなり満足度を高めることができた。

HCAP 東京カンファレンス 2017 総括

私たち HCAP 東京大学運営員会 11 期は、関係構築・相対化・発信の 3 つを軸に東京カンファレンスを企画してきました。まずは日本に来るハーバードの学生と仲良くなること。そして、お互いに話し合う中で、自分の価値観や考え方がどのように位置付けられるかを知ること。そして自分の好きなものを文化的背景の異なる他者にしっかり伝えること。

カンファレンスが終わった所感から言うと、多少の失敗はあったものの概ね成功を収めました。
関係構築については、一緒にご飯を作るという共同作業によって仲を深めるカレー企画や、翻って真面目なテーマを設定して話す東大生交流企画などを通じて、仲良くなりました。もちろんハーバード生は元からコミュニケーションへのやる気や能力が高く、8 日間生活を共にすればある程度仲良くなるのは必然かもしれません。それでも、カンファレンスの最後に、私たちメンバーが、メッセージを書いた色紙を渡した際に多くのハーバード生が嬉しさに泣いているのを見て、自分たちの企画によってこの目的が達成されたことを改めて実感しました。

相対化については、演劇ワークショップの共同制作を通じて日常生活での振る舞いの違いを、宗教企画におけるディスカッションを通して宗教観の違いを浮き彫りにしようと試みました。ハーバード生は日本人の振る舞いや宗教観について知識を持ち合わせず、それを伝えるだけでハーバード生に驚きをもたらし、ハーバード生のコメントやリアクションによって私たちは自身の位置をより広い視野に基づいて相対化することができました。

発信については、京都観光・東京観光で街の面白さを伝えたり、ロボット企画で日本の技術の高さ、研究の多様さを伝えたりしようと試みました。発信のテーマの主眼に置いた「伝え方の工夫」というよりも街自体が持つ面白み、魅力や風景の迫力に起因するところも大きかったですが、かなりの感動をハーバード生にもたらすことができました。また、ロボット企画についても、訪問先の先生方に「伝え方」の部分を完全にお任せする形となりましたが、それぞれの研究の面白さ等は十分に伝わっていたように感じます。

正直に言って悔しさを感じる箇所が多少あったことは否定しようがありません。しかし、概ね成功を収めた上で、この「これだけの恵まれた環境があればもっとできたはずなのに」という形の贅沢な後悔ができるのは、やはりその「恵まれた環境」を作り出してくださった全ての皆様のおかげです。この場を借りて改めて御礼申し上げます。

一年間での経験、そして成果物としての東京カンファレンスを終えた後に残ったこの気持ちを忘れることなく、さらなる成長を続けていくことを誓い、筆を擱きます。

HCAP 東京大学運営委員会 11 期 副代表
小坂真琴

HCAP 東京カンファレンス 2017 会計報告（2017 年 6 日 5 日時点）

支出の部

項目	金額（円）
交通費	602,612
宿泊費	415,400
食費	318,846
企画費	262,383
雑費	174,885
計	1,774,126

収入の部

項目		金額（円）
寄付金	株式会社ベネッセコーポレーション	1,300,000
寄付金	アメリカ大使館	352,561
寄付金	駒場友の会	200,000
計		1,852,561

※８月末に再度決算を行ったうえで、収支差額は来年度以降の活動に引き継ぎます。

以上